

書 評 と 紹 介

北野 収著

『南部メキシコの

内発的発展とNGO

—グローバル公共空間における学び・
組織化・対抗運動』

評者：藤岡 美恵子

本書の問題意識の背景と目的

本書は、メキシコ南部オアハカ州を対象にした「ネオリベリズムと国民国家の連合による上からの開発、近代化への対抗運動」の調査をまとめたものである。著者はその多様な実践を「内発的発展」のプロセスと位置付ける。鶴見和子が提唱した「内発的発展」論は、1970年代中葉に提起された「もうひとつの開発／発展」と同様、西欧近代をモデルとする近代化論の枠組みに立つ開発論の批判から出発した。そして「地球上すべての人々および集団が、衣食住の基本的要求を充足し人間としての可能性を十全に発現できる、条件をつくり出すこと」を共通目標としつつも、その目標に至る道すじと、その目標を実現する社会の姿、そして人々の生活スタイルは、それぞれの地域の「固有の自然生態系に適合し、文化遺産にもとづき、外来の知識・技術・制度などを照合しつつ、自律的に創出される」プロセスを内発的発展と呼んだ⁽¹⁾。鶴見の内発的発展論の特長は、地域の固有性とそれぞれの地域の人々自身による自律的な創出プロセス（内発性）を重視した点にある。その

ため、地域の文化遺産（伝統）の作り変えの過程を重要視し、その「伝統の革新」の触媒、変化の担い手を「キー・パースン」と呼んだ。

本書の著者が着目するのはこのプロセスとしての内発的発展である。著者は開発政策論において内発的発展が「ほぼ定着した概念」（1頁）になったにも拘わらず、鶴見が念頭においた自律的プロセスとしての社会運動の側面が捨象され、そこに政策論と運動論の認識的断絶があると指摘する。この状況に対し「NGO・市民社会の活動の実体論と、その背後にある伝統・価値・哲学の媒介者としての知識人の役割に関する論考（解釈論）を、「接合」することにより、「運動」としての内発的発展論を再評価し、社会理論として精緻化」することを著者はめざす（ii頁）。

そのための手法は、メキシコ南部のオアハカ州（とくにテワンテペック地峡地域）の「ポスト開発」や「もうひとつの開発」の実践に携わる活動家との対話、ローカルNGOの活動や地域開発計画への反対運動などの実証的調査とその分析である。オアハカ州を調査対象としたのは、メキシコでグローバル化の進展による経済社会空間のドラスティックな再編成が進行していること、北米大陸内での南北格差と同時に、国内でもオアハカを含む南部諸州と北部との格差という二つの南北問題を抱えていること、そしてオアハカ州では反グローバル化運動や市民組織の活動が活発であるためと説明している。

評者は人権NGOの職員やボランティアとして、隣国グアテマラでマヤ系先住民族の地域共同体での教育やコミュニティラジオ局などを通じた組織化活動の支援に関わり、中南米の先住民族による反グローバル化運動を紹介する活動

にも関わってきた⁽²⁾。そうした活動を通じてポスト開発思想・実践に関心を持つようになったという経緯があり、そのため本書に対する評者の関心はおもに、ポスト開発を志向する実践がローカルな現実の中でどのような位置をもち、そこで実践者（活動家、知識人）が互いにどのように相互作用し、その中で知識人とされる人々やNGOがどのような役割を果たしているのかといった点にある。本書評もそのような視点を反映している。

なお、著者は内発的発展と、「開発／発展」概念そのものを否定するポスト（脱）開発を概念上区別しながらも、両者の概念や思想上の区別よりも実践における共通性に重きをおき、内発的発展運動にポスト（脱）開発運動やオルタナティブな開発を含めた理解を前提にしていると断っている。以下、次節で本書の内容を簡単に紹介し、最終節で評者のコメントを述べたい。

本書の内容

上述のように著者は、オアハカ州の社会運動と市民社会に人と組織という視点でアプローチする。第I部「個々人と時代との対話・交渉」のうち第1章から第3章では、3人の活動家へのインタビューを通して、それぞれの活動と思想の変遷をたどりながら、社会運動の担い手としての主体形成と構造の連関を探っている。取り上げるのは、元ビジネスマン、ゲリラ、政府高官で、その後転身して「脱プロ」の知識人（実践との関わりを持たない学者・知識人でも、開発実務や政策立案の専門家でもなく、草の根の市民・民衆活動に寄り添う知識人）として脱開発の思想を深め、フリースクール「地球大学」を主宰するようになるグスタボ・エステバ、60年代の学生運動から政治運動を経て、社会運動へと変遷を重ねながら地域の活動に関わってきた女性活動家イサベル、そして、地域の農民・

先住民族の貧困の問題にとりくむ中で、住民の自立のためのフェアトレードを始めたオランダ人のヴァンデルホフ神父の3人である。

エステバとの対話では、「開発」の思想とは明確に袂を分かたずポスト開発思想の諸側面が紹介される。著者はその根底に、オートノミーという優れて政治的な要求があることを指摘している。イサベルは政治運動から社会運動へとという活動遍歴を通じて、個々の運動が結局政党に吸収されていった経験から、市民社会の政党からの分離が重要だと主張する。ここでも、市民社会のオートノミーが鍵であると示唆される。ヴァンデルホフ神父のフェアトレード活動についても、通常の協同組合に見られるような国家の枠組みを前提とした共同の制度化ではなく、直接外国のNGOや市民団体と提携するネットワーク関係の重視という思想が指摘される。

第4章ではオアハカ州で社会運動に関わる普通の人々、すなわちエステバの主宰する「地球大学」で学ぶ青年、同大学に入学を希望する女性、農民組織で活動するメンバーらの「学び」の実践または動機を紹介している。そこから、社会運動に不可欠の「学び」が、どのような動機付けによるものなのか、そこにエステバなどの「脱プロ化」した知識人がどのような役割で介在しているのかを考察し、こうした普通の人々自身も「生活実践や外部者とのやりとりから、学びのニーズや欲求を自発的に育み、涵養し、さらに、知識人との交わりや非・不定型の学びを通じて、草の根レベルでの社会変革の担い手へと発展的に変化していく可能性」（122頁）を指摘する。

第II部では、第I部で見たような諸個人の動機とは別次元で、組織化、ネットワーク化がどのように展開したのかを検討している。取り上げられるのは、「農家直接支払い制度」の検討を通じたメキシコ南部の農村のおかれた周縁化

の構造、近代の典型的なジェンダー構造とは異なっており、母系制を核とし、4つのジェンダーが存在するという「女の町フチタン」⁽³⁾におけるジェンダー関係の内発発展への示唆およびグローバル化による変容（以上第6章）、オアハカのさまざまなNGOの活動（教会NGO、コミュニティラジオ、触媒としての農村青年NGO、政府と草の根組織を仲介するタイプのNGO）（以上第7章）およびコーヒー生産者ネットワーク組織の再構築とプエブラ・パナマ計画（PPP）反対運動（以上第8章）である。著者はこれらの事例を通じて、諸アクター間の人・情報・資金のやりとり、コミュニケーションのフローという捉え方の有効性を見出したとしている。

終章では、上に見たような「もうひとつの開発」を志向するオアハカの多様な運動が有機農業、フェアトレード、環境、人権教育などの具体的実践を重視し、単なる抗議・反対・権利要求とは異なる志向性を有するものであること、こうした展開を可能にした制度的受け皿がNGOという仕組みであったことが確認される。ローカルNGOはこうした「新しい社会運動」の主要な担い手であり、政府の政策や行政サービスとは別の次元での「公共性」を体現していると結論している。

著者はローカルNGOの発生、ネットワーク化、展開には「知識人」である個人がキーパーソンとして存在していると強調する。また、ネットワークを構成するNGO自体が資金的基盤も弱く非常に脆弱であるため数年ごとに離合集散しており、ネットワーク自体も新陳代謝していると指摘する。

そしてこうした社会運動やネットワーク活動の中で、エステバヤ、第I部・II部で取り上げられるさまざまな活動家のような「脱プロ知識人」、すなわち「動機付け・意識化がなされ、目的を遂行するに必要な最低限の専門的知見・

技術を習得し、草の根の社会変革運動の「主体」となり得る人々」が、草の根や文化に根ざしたニーズや不満の代弁者（エージェント）であると同時に、外部世界の科学・思想・理論に関する情報をコミュニティにもたらし、場合によっては動員する機能も有している（300頁）と結論する。

コメントと課題

本書の第一の意義は、従来この種のポスト開発論が「超ミクロ的な事例の羅列に陥りがちだった」(ii頁)のに対し、運動にかかわる諸個人の主体形成と構造との連関および学びに注目することで、内発的発展論の重要な要素である内発的・自律的な創造のプロセスを見出そうとした点にあるといえる。「脱プロ」知識人の役割に関する著者の結論は、グアテマラでの評者の経験に照らしても首肯できるものであるし、開発への政策論的アプローチが顧みない、活動にかかわる「普通の人々」の学びの過程という側面に注目したことは高く評価されるべきである。「知識人主導の社会運動というステレオタイプ」(122頁)に対し、「普通の人々の日常の実践から生まれる問題意識こそが社会運動の源泉であり、内発的発展の種子は彼らの学びへの欲求のなかに見出せるのではないか」(122頁)と結論づけている点は重要である。

ただ敢えていえば、それは社会運動内部のアクターから見れば自明のこととも言える。もちろん、現実の実践の場での「普通の人々」の動機付けと脱プロ知識人との関係、外部アクターの影響などは複雑に絡み合っている。しかし、運動はそれがどのようなものであれ、そこに関わる諸アクター自身が問題意識を持ち、さまざまなレベル・内容の参画を選び取ってはじめて成立するものであろう。「普通の人々」が外部アクターや知識人の影響を一切受けずに自律的

な社会運動を構築しているとの想定が非現実的であるように、「普通の人々」を受動的な追従者、外部アクターに振り回される存在としてのみ捉えるのも非現実的である。もちろん、著者はそのような見方に立っているわけではない。しかし、私たちがむしろ問題にすべきなのは、上に引用したような結論が社会運動研究において出発点とならないのはなぜかということではないだろうか。

例えば、2009年6月、ペルーで多国籍企業による石油・天然ガス開発に抵抗して道路封鎖を行っていた先住民族約五千人に対し警察が襲撃を加え、多数の死傷者が出るという事件が起きた際、ガルシア大統領は、先住民族が一部の政治家や国外から扇動されていると非難した。先住民族は運動の主体になり得ないというこの考え方は、先住民族への人種主義の表れにはかならない。また、定松⁽⁴⁾は援助の現場での自らの経験について、「住民主体の参加型開発」を追求していたつもりが、実は当の住民らは自分たちの政治・社会運動の一環として、援助側の求める「主体」像に合わせて援助団体との関係を構築していたことに気づき、援助する側が自らにとって都合のよい「主体」像を作り上げていたに過ぎなかったのではないかと振り返った。ここでも社会運動の「主体」が「発見」されたのである。すなわち、探究すべき問題は当の「人々」（「住民」「民衆」「先住民族」等々の「主体性」を語る援助者として、研究者としての私たちの視線の方にあるのではないか。

第二にNGOの位置付けについて、著者はNGOという語をその非政府性に注目して使っていると述べ、社会運動もしくは民衆組織とNGOの違いに重点をおいた分析はしていない。そのこと自体は調査の対象や目的からして妥当であるといえるが、評者らが別のところ⁽⁵⁾で問題にしたように、NGOが社会変革の触媒となるのでは

なく既存の制度の補完的役割を負ってしまうという側面には留意が必要である。ここでいうNGOとは、専門知識／専門家主体で、固定的な組織をもち、事業主体の活動を行い、政治とは距離を置くような特徴を備えた組織である。そのような組織体としてのNGOが社会運動や民衆組織とどのような関係をもち、どのような影響を与えているのかについての分析は、ある地域の「内発的発展」プロセスを捉える際に欠かすことはできないと考える。オアハカ州の場合、著者自身も触れているように、NGOと先住民族共同体の関係の分析が鍵を握るであろう。その意味で、ローカルNGOを新しい社会運動の主要な担い手として位置づける著者の議論には、若干の留保を付したい。

最後に、ポスト開発志向がローカルな現実の中で人々にどの程度受容され（またはされず）、その活動や運動にどう影響しているかという点も、本書の調査分析の範囲を超えているかもしれないが、極めて重要な課題であろう。なぜなら現実には「北」に住む私たちと同様、「南」の人たちの大部分も、近代的開発が厳しい生活から脱却する方法だと考えているからだ。しかしその一方で、各地の先住民族運動のように、自らの手で「開発／発展」を再定義することを自己決定権行使の一環として位置づけ、固有の「伝統」に依拠しながら自分たちなりの価値を実現しようという試みも起きている。著者も述べるように、そうした運動をユートピアと片付けるわけにはいかない。なぜなら、それらは近代化によってむしろ貧しくさせられてきたことを自らの経験からよく知る人々による試みだからだ。こうした運動が今後のポスト開発研究に大きな示唆を与えてくれるのではないだろうか。

注
(1) 鶴見和子『内発的発展論の展開』筑摩書房、1996年、9頁。

- (2) IMADR - MJPグアテマラプロジェクトチーム編『マヤ先住民族 自治と自決をめざすプロジェクト』反差別国際運動日本委員会発行・現代企画室発売，2003年。藤岡美恵子・中野憲志『グローバル化に抵抗するラテンアメリカの先住民族』現代企画室，2005年。
- (3) ベンホルト＝トムゼン，ヴェロニカ『女の町フチタンーメキシコの母系制社会』藤原書店，1996年。
- (4) 定松栄一『開発援助か社会運動か—現場から問い直すNGOの存在意義』コモンズ，2001年。
- (5) 藤岡美恵子・越田清和・中野憲志編『国家・社会変革・NGO—政治への視線／NGO運動はどこへ向かうのか』新評論，2006年。（北野収著『南部メキシコの内発的発展とNGO—グローバル公共空間における学び・組織化・対抗運動』勁草書房，2008年11月刊，xiii+355頁，定価3,800円+税）
（ふじおか・みえこ 法政大学国際文化学部兼任講師）

【協定会史料】 法政大学大原社会問題研究所 監修
協定会研究会（梅田俊英・高橋彦博・横関至 編）

『産業福利』復刻版（全三回配本）

■わが国労働安全運動の源流と展開過程が明らかに

産業福利協会が一九二六年に創刊し、以後発行主体を変えながらも一九年間にわたり発行された月刊誌を完全復刻。草創期の安全衛生運動の実態を継続的に把握でき、現代の労災問題への貴重な示唆を与えうる基礎史料。第三回配本では、第一巻全二号を補遺として収録。

〔第一回配本〕 一九二七年～一九三三年
A4判上製 全7巻十別巻 総2,710頁 揃294,000円

〔第二回配本〕 一九三四年～一九三八年
A4判上製 全8巻 総2,876頁 揃294,000円

〔第三回配本〕 一九三九年～一九四四年／補遺
A4判上製 全8巻 総2,524頁 揃294,000円

■大原社研が保管する膨大な協定会基幹史料を公開

日本社会労働運動資料集成I・II（マイクロフィルム版）

〔I〕一九二〇～三〇年代 全114リール 揃2,730,000円
〔II〕一九三一～四〇年 全62リール 揃1,575,000円

■歴史的価値の高い精密な生活実態調査の記録

都市・農村生活調査資料集成I・II

〔I〕A5判上製 全12巻 総4,760頁 揃262,500円
〔II〕A5判上製 全12巻 総6,080頁 揃262,500円

■社会労働運動史の定説を覆す、再評価の試み

協定会の研究 法政大学大原社会問題研究所 編
梅田俊英・高橋彦博・横関至 著

A5判上製 388頁 5,460円

■両機関の営みに共通する地下水脈を探索する

戦間期日本の社会研究センター
——大原社研と協定会——

高橋彦博 著

A5判上製 364頁 6,090円

柏書房 〒113-0021 東京都文京区本駒込 1-13-14 TEL.03-3947-8251 FAX.03-3947-8255
http://www.kashiwashobo.co.jp <価格税込>